地域を興す vol.2

遊休農地でいちじくを作ってみた

OKB総研 委嘱コンサルタント
河合 達郎 氏 （一般社団法人 山学（やまなび） 代表理事）

名句ほど　しみじみできぬ夜の鹿

びいと啼（なく）　尻声（しりごえ）かなし　夜の鹿
松尾芭蕉

秋を迎えた岐阜県本巣市北部の中山間地では、毎夜、鹿の甲高い遠吠えがこだましている。奈良の春日では人気者でも、ここでは「害獣」の扱いを受けている野生動物だ。この山あいで農業に携わる人たちの中では、松尾芭蕉が詠んだように、その鳴き声を聞いてしみじみと風情を感じる人はきっと少数派だろう。

私自身もその一人だ。ここで農業に携わり3年半が経つ。その大変さと魅力を、自らの経験を踏まえて考えた。

遊休農地の再活用を目指して始めたいちじく栽培

本巣市北部の山あいで遊休農地をお借りしたのは、2021年5月だった。総務省の「地域おこし協力隊」という制度を活用してここに移り住んできてすぐのころ。本巣市が設定した協力隊のミッション「遊休資産（空き家や遊休農地、山林等）の活用による地域活性化」に則り、自ら担い手となるべく、地域の方々から遊休農地をお借りして再活用に向けた取り組みを始めた。

地域の方は、新参者を温かく迎え入れてくれた。地域農業をよく知る地元のベテランのご紹介で、隣り合う4筆・計約3反の農地をお借りすることができた。いずれも、もともと本巣市特産の富有柿が栽培されていた畑だった。周りは山々に囲まれ、アユ釣りが盛んな根尾川がすぐ近くを流れ、空を見上げればトンビが旋回している。中山間地の自然を肌で感じられる環境だ。

この場所で、私はいちじくの栽培を始めることにした。いちじくを選んだ理由はいくつかある。自分自身の実家でも富有柿やブルーベリーを育てていて、果樹には思い入れがあったこと。苗を植えてから収穫できるようになるまでの年数が他の果樹に比べて短いこと。栽培の難易度が比較的低いとされていたこと。本巣市内でも、地区こそ違うが栽培をしている農家さんがいたこと。加工品の可能性もありそうだということ。

「難易度が低い」という触れ込みを、門外漢だった私は「大変ではない」ということと同義だととらえていた。それが大いなる勘違いだったということは

山あいの遊休農地を再生して育ったいちじく。「自然豊かな場所で育まれた」というイメージは、消費者に受け入れられるのではないだろうか

本巣市北部でお借りした元柿畑の遊休農地。当時は柿の切り株が残されたり、雑木が伸びたりしていた（2021年5月）

やってみて痛感したのだが……。ともかく、当時はそうした理由から栽培する作物をいちじくに決めた。

再生目指し2年半の末、初収穫

雑草を刈り、チェーンソーで雑木を切り倒し、残されていた柿の切り株を重機で引っこ抜くところから始めた。市内のいちじく農家さんに弟子入りし、手ほどきを受けながら場を整え、獣害防止の柵を設置し、その年の年末までに挿し木と苗木で約100本を植えた。

そして、遊休農地の再生に着手して2年半。2023年秋に初めての収穫を迎えた。本巣市広報誌「広報もとす」(2023年12月号)のコラムに、当時の思いをこう書いた。

「草に追われるように草を取り、木の手入れを続け、この2年半で『日がな一日、いったい何のためにここで汗を流していたのか?』と思ったことは正直数え切れません。自ら育てた作物を食べ、喜んでもらうことがどれほど感慨深いことか。前職の記者から転じ、自らの手足を動かすことをテーマに実践し、ようやくその感動がわかりました」

本当に収穫できるのか?　いちじくが1個もならなかったら、どうしよう……?

そんな不安にさいなまれたことも数え切れないほどあった。樹上で真っ赤に実ったいちじくを初めて見つけたときはほっとした。何とか実ってくれたいちじくは道の駅や名古屋にある

柿の切り株を重機で掘り起こす(2021年8月)

切り株がなくなった畑をトラクターで耕す(2021年8月)

いちじく畑の周囲は、ワイヤーメッシュと鉄パイプで防獣柵を自作した(2021年11月)

防獣柵で囲み、挿し木と苗木を約100本植えた(2022年5月)

岐阜のアンテナショップに出荷したほか、縁あって県内外のケーキ店・カフェにも納品させていただいた。

この原稿を執筆している2024年10月時点では、2シーズン目の収穫期を終えようとしている。前年より収量が増え、収穫も手入れも夫婦でするようになった。どうしても発生する傷物は、妻がドライフルーツやジャムなどに加工して商品化している。本巣市ふるさと納税返礼品のラインナップにも加えてもらった。中山間地における農業の可能性を、少しずつではあるが感じるようになってきた。

獣害、気候条件…中山間地ならではの大変さ

こうして3年半を振り返ってみると、一つ思うことがある。私自身、農業に関して無知で素人だったからこそ、中山間地での農業にチャレンジすることができたのだろうということだ。中山間地ならではの大変さを知ったいま、「もう一度、中山間地の遊休農地を再生せよ」と言われると、ウッと言葉に詰まってしまう。

山あいならではの大変さ。その筆頭に挙げられるのが、冒頭に示した獣害だろう。カラスやモグラの被害は平野部でも変わらないが、中山間地には鹿や猪までやってくる。鹿や猪は畑を踏み荒らし、野菜畑や田んぼも被害を受けている。

周辺では最近、色づき始めた富有柿が付いた枝が折られている光景をしばしば見かける。柿農家さんによれば、鹿が足を引っかけたり口で引っ張ったりして折ってしまうそうだ。木の手入れや草刈りなど1年を通して作業し、ようやく迎える収穫を前にしての被害だ。「また来年も」という意欲がそがれる思いになるのは容易に想像ができる。

侵入を防ぐためには防獣柵で囲えばいい。とは言うものの、これもコストと時間がかかる。簡易的なネットは低コストだが倒されやすく、がっちりした柵は重労働で費用もかさむ。平野部で農業をするにあたっては不要なお金と労力がかかってしまう。

そのうえ、日照時間や気候条件の不利がある。山あいは、太陽が山で隠れてしまう時間が長い。平野部に比べ気温が低く、降雪量も多い。それは収穫時期や収量に直結してくる。また、山の斜面に広がる農地では畔の面積が大きくなる。その分、「草刈りの負担が大きい」と言う米農家さんもいた。

厳しい中山間地の農業、その魅力は?

では、中山間地の農業はデメリットばかりなのか。決してそんなことはない。ここ本巣市北部の中山間地だけを見ても、遊休農地はあちこちにある。これから農業に携わってみたいという人にとっては挑戦しやすい状況だといえる。観光農園や農泊、半農半Xといったキーワードとも相性がよい。

私自身が感じる大きな魅力は、「山あいの自然豊かな環境で育った作物だ」というイメージを、消費者に想起してもらいやすいということだ。

緑の山々に囲まれ、アユが泳ぐ根尾川が流れ、トンビが上空を舞う。寒暖差が大きい気候の中、澄んだ山水が注ぎ込む田畑で育った作物である。そんな情景を、それぞれの作物に乗せて届けていくことができる。たかがイメージだが、されどイメージ。そのイメージが、実際に商品の付加価値を高めていると感じる。

そして、その作物に対して消費者からよい反応があると、生産者にとっての誇りにもなる。厳しい環境ではあるが、この中山間地でよいものを育てていきたい。私の場合は、そんな地域に対する思いにもつながっている。

早朝に収穫したばかりのいちじく(2024年9月)

山学（やまなび）のこと

ここで生まれてよかった――。
子どもたちがそう感じられる、
中山間地コミュニティの実現を目指しています。

私たち山学の拠点がある岐阜県本巣市の北部は、自然豊かな中山間地です。
能郷白山をはじめとした山々に囲まれ、清流・根尾川が流れる場所にあります。
ローカル線・樽見鉄道が走り、
星空がキレイで、ウグイスの声が響き、ホタルが光る。
そんな自然を満喫できる場所です。

豊かさの一方で、子どもたちにとっては大変なこともいっぱいあります。

学校の友だちが少なくてさみしい。
友だちが山の向こうに住んでいて、放課後に気軽に遊べない。
整備された公園や学習スペースがなく、自宅と学校以外の居場所がない。
習い事が遠くて気軽に通えない。
高校も遠くて、どうしても通学時間が長くなってしまう。

いま、たまたまここで生まれ育つ子どもたちのために、何ができるのか。
将来「町で生まれていれば」と悔やむのではなく、
「山あいで育ってよかった」と感じてもらえるように、何をすべきなのか。

私たち山学は考え、取り組みを進めていきます。

一般社団法人 山学（やまなび） 代表理事
河合 達郎 氏

1987年5月3日 岐阜市生まれ
2006年3月 岐阜県立岐阜北高等学校 卒業
2010年3月 立命館大学国際関係学部 卒業

職歴
- 株式会社朝日新聞社（2010年4月～2021年3月）
- 岐阜県本巣市地域おこし協力隊（2021年4月～2024年3月）
- フリーライター、編集者（2021年4月～現在）
  2024年3月より、朝日新聞岐阜県版でコラム「無人駅から」連載中。
- tete.（2023年5月～現在）
  いちじくの栽培／加工／販売
- 一般社団法人 山学 代表理事（2024年3月～現在）
  学習支援／地域食堂／自然体験
  ローカル線・樽見鉄道の無人駅で開く学習支援の継続に向け法人化。本巣市内の30代3人で設立。中山間地の子どもに焦点を当てた活動を展開する。

山学レポート

いちじく農園「tete.」のホームページ

いちじく農園「tete.」のインスタグラム

いちじく畑のすぐ近くを流れる根尾川（2021年6月）